

1 古語による表記・文法(一、二)

- 【 】 現在使われている言葉。
 - ↓ () (仮名遣いで表記する。)
 - () (時代中期の言葉を基準としている。)
 - ↓ () (文法(古典文法ともいう)を用いる。)

2 歴史的仮名遣いとその読み方(三、四)

〈五十音図〉

行	行	ア行	カ行	サ行	タ行	ナ行	ハ行	マ行	ヤ行	ラ行	ワ行
ア段			か	さ	た	な		ま		ら	
イ段			き	し	ち	に		み		り	
ウ段			く	す	つ	ぬ		む		る	
エ段			け	せ	て	ね		め		れ	
オ段			こ	そ	と	の		も		ろ	

他に、濁音のガ、ザ、ダ、バ行もある。

〈歴史的仮名遣いの読み方の原則〉

- ①ワ行の「ゐ・ゑ・を」
↓ 「 . . . 」と読む。
 - ②語頭以外のハ行「は・ひ・ふ・へ・ほ」
↓ 「 . . . 」
と読む。
 - ③「ア・イ・エ・オ段」 + 「う・ふ」
ア段(a) + 「う・ふ」(u) ↓ 「**オー**」
イ段(i) + 「う・ふ」(u) ↓ 「**ユー**」
エ段(e) + 「う・ふ」(u) ↓ 「**ヨー**」
オ段(o) + 「う・ふ」(u) ↓ 「**オー**」 と読む。
 - ④語頭以外の「む」 ↓ 「 . . . 」と読む。
 - ⑤「くわ・ぐわ」 ↓ 「 . . . 」と読む。
 - ⑥ダ行の「ち・づ」 ↓ 「 . . . 」と読む。
 - ⑦大きい表記の促音「っ」・拗音「ゃ・ゅ・よ」
↓ 促音「ッ」 【やぶつて ↓ ヤブツテ】
↓ 拗音「ゃ・ゅ・よ」 【ちゅうぐう ↓ チュウグウ】
- ☆小さい表記と同様に読む。

★大きく書いてみましょう!

☆ワ行の「イ」

☆ワ行の「エ」

一、次の文の文体は文語か、口語か。

- ① 昔、男がいた。 () ()
 ② 昔、男ありけり。 () ()

二、歴史的仮名遣いで書かれている次の語を、現代仮名遣い(ひらがな)に直しなさい。

- ① こひ () () ② いはく () () ③ めみ () ()
 ④ くちをし () () ⑤ こほり () ()

三、歴史的仮名遣いで書かれている次の語の読み方(発音)について、空欄に適当なカタカナを入れなさい。

例 どうじ(童子) ↓ ドージ

- | | | | |
|---------------|-----|-------------|---|
| ① きふなり(急なり) ↓ | ナリ | ② あふぎ(扇) ↓ | ギ |
| ③ えうなし(要無し) ↓ | ナシ | ④ ほふし(法師) ↓ | シ |
| ⑤ けふ(今日) ↓ | [] | | |

四、歴史的仮名遣いで書かれている次の語の傍線部の読み方(発音)を、カタカナで書きなさい。

- ① いかむ(行かむ) () () ② くわし(菓子) () ()
 ③ あづき(小豆) () ()

五、歴史的仮名遣いで書かれている次の語を、現代仮名遣い(ひらがな)に直しなさい。

- ① おつて(追つて) () () ② ちやうど(調度) () ()

1 言葉の単位(一〜四)

まとまった思想や感情などを表す一続きの言葉の単位を①という。文頭から句点(。)までを一つの①とする。文章は、一つ以上の①からできている。文を意味や発音の上で、不自然でない程度にできるだけ小さく区切った言葉の単位を②といい、一つ以上の③からできている。③とは、②をさらに小さく句切った言葉の最小の単位である。

《例》 我ら、水の上に遊びつつ魚を食ふ。

2 文節の種類(三、五)

「風吹く。」 《何が》を表す「風」の部分① 語(部)という。

《どうする・どんなだ・何だ》を表す「吹く。」の部分②

語(部) 語(部) という。

「白き波が寄す。」

「白き」は直後の「波が」の「波」(名詞(体言))を修飾しているので、
③ 語(部) である。

「みの虫いとあはれなり。」

「いと」は直後の「あはれなり」(形容動詞(用言))を修飾しているので、
④ 語(部) である。

「行けどもえあはで帰りけり。さて詠める。」

「さて」は前後の文や、文節をつなぐ役割をするので、
⑤ 語(部) である。

「あなめでたや。」 「あな」は他の文節に直接結びつかない部分なので、
⑥ 語(部) である。

《例》 我ら、水の上に遊びつつ魚を食ふ。

3 単語の働き(四、P10 補足)

単語には二種類あり、単独で一つの文節を作ることができる単語を① 語といい、その単語だけでは一つの文節を作ることができず、①の下に付属して文節に含まれる単語を② 語という。

「咲く」という語が、「咲かず」「咲きて」「咲く時」「咲けども」「咲け。」と、用い方によって語の形が変化することを③ 語があるという。

《例》 我ら、水の上に遊びつつ魚を食ふ。

一、次の傍線部の文節の種類を答えなさい。

- ① 昔 a 男 b ありけり。 (a) (b)
- ② a 小 さ き も の は み な b う つ く し。 (a) (b)
- ③ a あ な や、雨ぞ b い み じ く 降る。 (a) (b)

二、次の一文に「一」を書き込み、文節に分けなさい。また、文節の数を答えなさい。

- ① 昔男ありけり。 () ()
- ② 小 さ き も の は み な う つ く し。 () ()

三、次の一文に「一」を書き込み、単語に分けなさい。また、単語の数を答えなさい。

- ① 昔男ありけり。 () ()
- ② 小 さ き も の は み な う つ く し。 () ()

四、次の文中の自立語は□で囲み、付属語は○で囲みなさい。

- ① 昔男ありけり。
- ② 小 さ き も の は み な う つ く し。

五、次の文中で活用する語(単語)をすべて抜き出さなさい。

- ① 昔男ありけり。 () ()
- ② 小 さ き も の は み な う つ く し。 () ()

☆ポイント

- ① 文節の頭には必ず **自立語** がくる。
- ② 文節は **一** つの単語 (**自立語**) で構成されることもある。
- ③ 文節の中に付属語が **ない** 場合もある。
- ④ 文節の中に付属語が **複数ある** 場合もある。(芋、乾きにけり。)
- ⑤ 自立語にも付属語にも活用する語・しない語はある。

1 品詞(一)

単語を文法上の性質によって分類したものを という。

単語を、①自立語か付属語か、②活用するかしないか、③文中での役割は何か(主語・述語・修飾語・接続語・独立語)、の基準によって、十種類(代名詞を名詞の一つとする)の品詞に分ける。

一、品詞分類表(前ページ・P11)を見ながら、品詞の見分け方の手順となる次の文章の空欄を適語で埋めなさい。

最初に単語が①か、②かを判断する。

自立語であった場合、まず③があるかないか判断する。

活用があつて、単独で述語になる動詞・形容詞・形容動詞を、④とよぶ。

④のうち、ウ段で言い切るものを⑤という。ラ行変格活用は例外としてイ段で言い切る。

④のうち、「し」「で」で言い切るものを⑥という。(例外として「じ」で言い切るものもある。)

④のうち、「なり」「たり」で言い切るものを⑦という。

活用がなく、単独で主語になるものを名詞というが、名詞は⑧とよぶ。

活用がなく、単独で主語にならず、文中で体言以外を修飾するものを⑨という。

活用がなく、単独で主語にならず、文中で体言を修飾するものを⑩という。

活用がなく、単独で主語にならず、文中で接続語となるものを⑪という。

活用がなく、単独で主語にならず、文中で独立語となるものを⑫という。

付属語であった場合も、活用があるかないかを判断する。付属語で活用があれば⑬

活用がなければ⑭という。

二、次の傍線部の単語の品詞名を答えなさい。

① 昔 a 男 b あり c けり。 (a) (b) (c)

② 小 さ きものは a みな b うつくし。 (a) (b) (c)

③ a あるいは露落ち b て花残れり。 (a) (b) (c)

④ a あなや、雨 b ぞ c いとど降る。※ますます (a) (b) (c)

⑤ とかく言ひけれども、 a つひに b 静かならず。 (a) (b) (c)

1 用言(一)―活用のある自立語

(1)活用

① とは、他の語が下に接続したり、用い方の違いによって、語の形が変化したりすることをいう。①をする語のことを活用語という。

変化した語形に付けられた名称を**活用形**といい、② 形、③ 形、④ 形、⑤ 形、⑥ 形、⑦ 形がある。活用するとき変

化しない部分を⑧ といい、変化する部分を⑨ という。

★下に続く主な語に合わせて、「咲く」を活用させよう。(P14・P15)

活用形		「咲く」 下に続く主な語
未然形		ず・む・ば
連用形		けり・たり・て・「」・用言
終止形		べし・と・「。」
連体形		体言 (こと・時・人)・に・を・ほど
已然形		ど・ども・ば
命令形		「。」・命令調

確認

一、次の()内の語を下の語に続くように活用させなさい。

- ① (書く)ども ② (言ひ)べし ③ (歩む)ず

- ④ (見る)。命令調 ⑤ (見る)ず ⑥ (す)時

- ⑦ (思ふ)て ⑧ (過ぐ)けり

二、次の傍線部の語の活用形を答えなさい。

① あれども

② 来ず

③ 着よ。

④ 流る。

⑤ 騒ぎて

⑥ 過ぐる日

⑦ 求めず

⑧ 立てど

⑨ 子ある人

⑩ 死ぬる時

⑪ 歌ひて

⑫ あらば、

動詞

… () (語で活用が) ()、単独で述語になる () ()の二つ。
 言い切りの形が「 段」になる。(「あり」などの例外もある。)
 事物の存在・動作・作用を表す。
 動詞は活用のしかたによって、次の九種類に分類される。

〈動詞の活用の種類：九種類〉 ※活用の種類の下に、活用語尾やその段(母音)を載せた。

		活用の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
①	四段活用	a	ー	u	u	e	e	e
②	上二段活用	ー	ー	u	u	u	u	ーよ
③	下二段活用	e	e	u	u	u	u	eよ
④	上一段活用	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ーよ
⑤	下一段活用	e	e	e	e	e	e	eよ
⑥	カ行変格活用	こ	き	く	くる	くれ	くれ	こ・こよ
⑦	サ行変格活用	せ	し	す	する	すれ	すれ	せよ
⑧	ナ行変格活用	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬれ	ね
⑨	ラ行変格活用	ら	り	り	る	れ	れ	れ

★活用語尾と段(母音)の右の表を暗記する!

☆九種類の動詞の活用の種類の見分け方

手順(1) 数の少ない(④)〜(⑨)は動詞と活用語尾を暗記し、動詞を見てすぐ活用の種類を判断する。

手順(2) 数の多いもの(①)〜(③)は「ず」を付けて未然形に活用させ、その活用語尾がア段か、イ段か、

エ段かを見て、四段活用か、上二段活用か、下二段活用かを判断する。

【例】 行かず ↓ 段 ↓ 四段活用

起きず ↓ 段 ↓ 上二段活用

受けず ↓ 段 ↓ 下二段活用

手順(3) 活用する行、活用の種類が間違えやすいものに注意する!

《数の多い動詞(正格活用)》

① 四段活用 (P17)

行く	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
									行 活用

《注意点》

① ア・ウ・ナ行はない。

② 「泳げる」など可能動詞は文語にはない。

③ 間違えやすい行

八行 食ふ・笑ふ・歌ふ など

カ行 飽く

ラ行 借る・足る・来る

② 上二段活用 (P23)

起く	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
									行 活用

《注意点》

① ア・ワ行はない。

② 間違えやすい行

ヤ行 老ゆ・悔ゆ・報ゆのみ

ハ行 生ふ・恋ふ・ななど

マ行 恨む

ダ行 怖つ・閉づ・恥づ など

③ 下二段活用 (P21)

受く	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
									行 活用

《注意点》

① 間違えやすい行

ア行 得・心得・所得 など

ハ行 与ふ・仕ふ・伝ふ など

ヤ行 覚ゆ・聞こゆ・見ゆ・消ゆ など

ワ行 植う・飢う・据うのみ

ザ行 混ず(交ず)のみ

ダ行 出づ など

★ 語幹と活用語尾の

区別がない三語

得・経・寝

《数の少ない動詞①…(正格活用)》

一年 組 番・氏名

…基本の語を暗記する！

④上一段活用(P22)

見る	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
									行 活用

《注意点》

- ①基本の九語は語幹と活用語尾の区別がない。
- ②基本の九語をおさえる。

- ③その他の語、複合語もある。

【例】用もちゐる、顧かえりみる など

⑤下一段活用(P20)

蹴る	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
									行 活用

《注意点》

- ①「蹴ける」の一語のみ。覚える。
- ②語幹と活用語尾の区別がない。

確認

一、次の上一段活用動詞と下一段活用動詞の活用表を完成させなさい。

蹴る	用ゐる	射る	居る	着る	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
													行 活用
													行 活用
													行 活用
													行 活用
													行 活用
													行 活用
													行 活用

一、上一段活用動詞と下一段活用動詞をすべて漢字で答えなさい。

上一段活用

【

】

【

】

【

】

下一段活用

【

】

二、次の上一段活用動詞の、活用を行を答えなさい。

①見る

②似る

③射る

④鑄る

⑤居る

⑥率る

(行)

(行)

(行)

(行)

(行)

(行)

三、次の動詞のうち、上一段活用動詞と下一段活用動詞をすべて選び、記号で答えなさい。

①着る

②歌ふ

③泣く

④走る

⑤煮る

⑥泳ぐ

⑦蹴る

⑧取る

⑨足る

⑩居る

⑪詠む

⑫脱ぐ

⑬見ゆ

⑭見る

⑮打つ

⑯射る

上一段活用

【

】

下一段活用

【

】

四、次の動詞の活用表を完成させなさい。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形		
打つ								打	活用
笑ふ								笑	活用
過ぐ								過	活用
報ゆ								報	活用
見る								見	活用
見ゆ								見	活用
蹴る								蹴	活用
得								得	活用
植う								植	活用

⑥カ行変格活用(P24)

来	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
									行 活用

《注意点》

①基本の一語は「来」のみ。覚える。語幹と活用語尾の区別がない。

②複合語もある。

【例】詣で来、参り来 など

⑦サ行変格活用(P25)

す	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
									行 活用

《注意点》

①基本の二語は「す(為)」「おはす」。二つを覚える。

「す」は語幹と活用語尾の区別がない。

②複合語もある。

【例】心す、死す、愛す、具す など

⑧ナ行変格活用(P18)

死ぬ	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
									行 活用

《注意点》

①基本の二語は「死ぬ」「往ぬ・去ぬ」。二つを覚える。

⑨ラ行変格活用(P19)

あり	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
									行 活用

《注意点》

①基本の四語は「あり」「居り」「侍り」「いまそかり」。四つを覚える。

一、数の少ない、覚えるべき動詞の基本語をすべて答えなさい。

上一段活用	【	】	【	】	【	】	【	】
下一段活用	【	】	【	】	【	】	【	】
カ行変格活用	【	】	【	】	【	】	【	】
サ行変格活用	【	】	【	】	【	】	【	】
ナ行変格活用	【	】	【	】	【	】	【	】
ラ行変格活用	【	】	【	】	【	】	【	】

二、次の活用表を完成させなさい。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
居り								行 活用
死ぬ								行 活用
おはす								行 活用
来								行 活用
蹴る								行 活用
率る								行 活用
似る								行 活用
捨つ								行 活用
落つ								行 活用
食ふ								行 活用

三、次の動詞の活用之行・活用の種類を答えなさい。

- ① 蹴る
- ② す
- ③ 煮る
- ④ あり
- ⑤ 往ぬ
- ⑥ 来

- ⑦ 鳴く
- ⑧ 下る
- ⑨ 寄す
- ⑩ 居る
- ⑪ 射る

- ⑫ 見る
- ⑬ 見ゆ
- ⑭ 死ぬ
- ⑮ 死す
- ⑯ いまそがり

形容詞

：() 語(で活用があり、単独で() 語)になることができる。
 事物の状態・様子・感情を表す。
 言い切りの形が「 」になる。(「いみじ」などの例外もある。)

《形容詞の活用と活用の種類》

形容詞は活用の仕方によって、次の二種類に分類される。

①ク活用

高し	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形

②シク活用

樂し	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形

《見分け方》

「なる」を付けて**連用形**に活用させ、その活用語尾が「く」「しく」かを見て判断する。

【例】 高し ↓ 高 なる ↓ ク活用
 樂し ↓ 樂 なる ↓ シク活用

確認

一、次の形容詞の活用の種類を答えなさい。

- ① おもしろし ② 長し ③ 白し ④ 嬉し ⑤ 美し
- ⑥ 賢し ⑦ なまめかし ⑧ いみじ

二、次の傍線部の活用形を答えなさい。

- ① 赤からず。 ② 良き人、 ③ 白けれども、 ④ 道細く、 ⑤ なかりけり

形容動詞

…() 語)で活用があり、単独で() 語)になることができる。
 事物の状態・様子・感情を表す。
 言い切りの形が「 」 「 」 「 」になる。

《形容動詞の活用と活用の種類》

形容動詞は活用の仕方によって、次の二種類に分類される。

① ナリ活用

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
静かなり							

② タリ活用

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
堂々たり							

確認

一、次の形容動詞の活用の種類を答えなさい。

①のどかなり

②騒然たり

③漫々たり

④おろかなり

二、次の傍線部の活用形を答えなさい。

①のどかなれども、

②漫々たりけり

③おろかならず。

形容詞・形容動詞の確認

一、次の形容詞・形容動詞の終止形を答えなさい。

①林の木近ければ、枝を拾ふにやすし、多く集まりぬ。

②昔、貴なる男、陸奥の国にすずるに行きいたりにけり。

二、次の形容詞・形容動詞の活用の種類と活用形を答えなさい。

①林の木近ければ、枝を拾ふにやすし、多く集まりぬ。

②昔、貴なる男、陸奥の国にすずるに行きいたりにけり。